

論文の内容の要旨

論文題目 河川をめぐる知識と権力：オランダ連邦共和国における河川行政の展開

氏 名 中澤 聡

本論文ではオランダ史における近世、すなわちスペイン・ハプスブルク帝国からの独立によってオランダ連邦共和国が誕生してから、それが 18 世紀末の革命によって終焉を迎えるまでの期間における河川管理の歴史を再検討することを課題とする。検討に当たっての主眼は以下の三点におかれる。すなわち第一に、それぞれに時代においていかなる問題が河川に関して存在し、その解決のためどのような方法が試みられたのかを明らかにすること、第二に、その取り組みの中で、いかにして河川が主権国家の管轄対象として定義されたのかを明らかにすること、そして第三に、その取り組みをめぐる対立の中で、水準測量と流量測定を基礎とする定量的で科学的な河川管理がいかにして志向されたのかを明らかにすること、以上の三点である。

第一点に関して、17 世紀においては主としてライン川諸派川間の水量配分の偏りが問題とされ、これを解決するものとして 1707 年に捷水路（パネルデン水路）が開削された。一方 18 世紀においては洪水、あるいはアイスダムによる河道閉塞に起因する水害の増加が問題視され、パネルデン水路の抑制、河道の片付け（拡幅）、側方分水などの対処法が提案された。

第二点に関して、17 世紀においては国防を管轄する連邦機関が防衛線としての河川に関心をもち、諸州、諸都市の利害を調停して改修事業を実現することを試みた。一方 18 世紀には、とりわけホラント州において、州主権の原理に基づき、州議会が主権者の直轄権益として同州内の河川の管轄権を有するという議論が行われ、州議会が諸都市の利害を調停して河川改修の主体となることが認められた。

第三点に関して、18 世紀のオランダ連邦共和国において生じた科学的河川管理への志向性は、共和国の強力な自治の伝統を背景としていた。すなわち、各州が強力な主権を有する連邦共和国において、河川のような州を越えた問題に取り組む場合、ホラントのような飛びぬけて富強な州といえども、他州の意向を無視することはできず、またホラント州の中でもドルドレヒトやホリンヘムといった議決権を有する都市の同意を取り付けねばならなかった。このため、河川改修をめぐる意思決定においては、十分な根拠に基づいた議論が求められた。その中で伝統的な専門家たちによるデータや彼らの方法に対する批判が生まれ、科学的な論証に対する関心が育まれていったと考えられる。